どこの誰よりも、先生を愛してる。

著・海月いおり

「河原先生、好きです。付き合って下さい」
「……は？」
　県立佐倉北高等学校。街中から少し外れたここは、一学年三十人弱しかいない小さな学校だ。放課後、家に帰ろうと校舎を出た私は、学校の敷地と道路の境界でタバコを吸っている河原先生を見つけた。少し小走りで駆け寄った……までは良かったのだが……。何を思ったか。好きという言葉が、何の躊躇いもなく口から漏れた。そして、今に至る。
「平澤……ふざけんな。寝言は寝て言え」
「寝言じゃないです」
　私、二年生の平澤菜都。
　勉強は嫌いで、成績は普通。テストの学年順位はいつも真ん中の辺り。部活はボランティア部に所属し、毎日一時間だけ活動を行っている。まぁ…可もなく不可もなく、どこにでもいる普通の高校生。
　ただ、一つ。学校の先生に片想いをしている、という事実を除けば。
「お前…俺が教師である上に、アラフォーのオッサンだってこと分かってる？　冗談でも有り得ねぇよ」
「冗談じゃないです」
　担任の数学教師、河原啓治先生。四十一歳。
　背が高くて細くて、スーツが良く似合う。声が低くて、手は大きく、指は細長い。サラサラそうな長めの髪。やる気の無さそうな、どんよりした目。黒縁の眼鏡。顔には皺もあり、決して若いとは言えないけれど、実年齢よりは間違いなく若そうに見える。
「先生に付き合って下さいなんて、冗談で言いません」
　バツ一で、現在独身。子供はいない。そんなところまではリサーチ済みだ。
「平澤…高校生らしく同級生を見てみろ。近くにいっぱいいるじゃないか」
「違います、私は河原先生が良いです」
「…はぁ…お前なぁ……」
　電子タバコを吸っている河原先生。黒くて細い機械から吸い口のようなものを取り外し、携帯用の吸殻ケースに入れた。
「他に目を向けろ。俺はダメだ。以上」
　そう言って河原先生は校舎に戻ってしまった。

「……先生が、良いのに」

桜の花びらは散り、沢山の木々が青々とし始めた四月中旬の今日。

私は、河原先生に振られた。

◆

「……河原先生に、告白した」

「はぁ!?」

翌日の朝。学校に行くのが少し憂鬱。…という感情は抑え、今日もきちんと登校をする。いつも一緒に行動している、幼馴染の渡津愛理と三崎圭司の三人で。

「菜都……告白は駄目だよ。担任なのに気まずいよ、絶対」

「それでも抑えられなかったんだもん」

愛理と圭司は二人とも頭を抱えながら少し俯いた。

「しかし…何でよりによって河原なんだよ。菜都の心情が心配」

「何でって…圭司にはない、大人の魅力が素敵だから。圭司と河原先生は同じ名前なのに、比にならない」

「んな!?　俺と比較しないでくれる!?　てか、読みが【けいじ】で同じなだけで、漢字は違うから！」

三人横に並んで、ギャアギャア言いながら学校を目指す。

本当は、河原先生とは年の差がありすぎることは分かっている。両親の方が、先生と年が近いし…。何より私では釣り合わない。けれど、そんなことどうでも良いと思うくらい好きなんだ。

勿論、きちんと河原先生のことが好きな理由もある。でもそれは、またのお話。

「菜都のこと昔から知っていて理解しているつもりだけどさ。河原先生に片想いだけは、どう頑張っても無理だわ。理解できない」

「こんな小さい学校で気まずくなったら…どうすんだよ」

良いよ。理解できなくても。誰かに理解して貰いたいとは、思っていないから。そんなこと思いながら、一歩ずつ歩みを進める。

学校の校門まで、あともう少し。

出頭

「はい、始めます」
「姿勢を正して、礼」
朝のショートホームルーム。教壇に立っている河原先生はいつも通りだった。
「今日は前に配布したアンケートの回収日だ。もし忘れた奴がいたら職員室に来て自首すること。連絡は、このくらいだ」
そして河原先生は、黒い出席簿とスケジュール帳をパタンと閉じて一言。
「あと、平澤。お前は問答無用で、放課後職員室に出頭な。忘れんなよ」
そう言い残して、教室から出て行った。
「……え？」
フリーズしたまま固まっていると、ニヤニヤした愛理と圭司が近付いて来る……。
「菜都、出頭……！」
「出頭って、警察署などに行くときに使う言葉だよな。職員室に出頭は違うと思う」
「出頭とか自首とか。きっとそんな言葉を使いたいお年頃なのよ！」
「いや、言うてオッサンじゃん」
私の横でそんな会話をする二人。出頭って、何だろう。昨日のこと……しかないよね。
当の私は、無性にドキドキしていた。

◆

「……失礼します、二年の平澤です。河原先生……」
「今行く」
放課後、言われた通りに出頭した私。河原先生は手招きをしながら、同じ階にある相談室に向かった。
「……さて、そこ座りな」
狭い相談室に置かれた、二セットの生徒机。そこに座るよう促された。言われた通り大人しく座ると、先生も向かいに座って…小さく口を開く。
「平澤、昨日の話だけどさ」
「……」
「突然だったから。咄嗟に思いっきり突き放したけれど…取り敢えず、好意を抱いてくれていたことに感謝だけはしておこうと思って」
「……」

感謝って。……振られたのに、感謝なんてされてもねぇ。
「……」
なんて答えれば良いか…分からない。無言のまま黙り込んでいると、先生は少し困ったように頬を掻く。
「まぁ…その。好意は受け取れないけどさ。俺、教師であり…オッサンだし。でも嬉しかったっていう感情も少しあったからさ、感謝だけ伝えさせて貰おうと思って。それだけ」
諦めの悪い私。その言葉に、僅かな希望を感じた。
「……まだ、可能性があるってことですよね」
「え？」
「私。昨日振られたからって、別に先生のことを諦めたわけではないですよ」
「……」
「先生が好き。それは今も変わりません。…先生が嬉しかったと少しでも感じてくれたなら、尚更私は、河原先生のことを諦めません」
「いや、平澤……あのな……」
何か言いたげな先生だったが、これ以上の言葉は無用。
「では、失礼します」
先生が言いかけた言葉を遮って、私は相談室を後にした。

先生

河原先生…格好良い。考えるだけでもドキドキして、心がキュンとして…胸が苦しくなる。別に年上が好きなわけではない。『河原先生が』好き。……ただ、それだけ。
オッサンとか、先生だとか、そんなの一切関係無い。

ガラッ

「お、こんにちは。平澤さん」
「柚木先生、こんにちは」
ここはボランティア部の部室。ボランティア部に所属している私は、放課後ここで少しだけ活動を行っている。年々減少していく生徒数。それに伴い、このボランティア部も部員数がどんどん減って行った。去年までは卒業していった先輩が五人も居たから、それなりに活気もあったけれど。今は先輩も後輩も、同級生もこのボランティア部には居ない。
寂しいけれど、私と顧問の柚木雅人先生の二人で活動を行っているのだった。

「平澤さん、今日は校内の草を少し抜きましょうか」
「分かりました」
柚木先生は国語教師。小柄で、少し癖毛な濃い茶髪。年齢は……二十六歳って言っていたかな。そんな柚木先生は、女子生徒から人気だ。

◆

掃除道具を持って、正面玄関前に向かった。
背丈を伸ばし始めている雑草たち。これらを全部抜いてスーツ姿で軍手をはめている柚木先生。固そうな草を、次々と引き抜いていた。
「平澤さん、制服のままだと汚れますよ」
「そういう先生こそ、スーツで草抜きはおかしいです」
「僕は良いのです。汚れるほどやりませんから」
「そんな宣言されましても…」
草を抜きながらグラウンドに目を向けた。トラックを走っている陸上部。その中に、愛理と圭司もいた。
二人は小学校の頃から地域のスポーツクラブで陸上をしていた。その後、中学でも高校でも陸上部に入り活動をしている。大会に出れば必ず入賞して帰る二人。実は二人とも、かなりの実力者だ。
「渡津さんと三崎くん。次も大会に出るんですよね」
「そうみたいです。今が頑張り時だと気合入れていました」
「…凄いですね。こんなに小さい学校の名前を県大会や地方大会で轟かすなんて」
「本当、凄いです」
それに比べ私は、なんの取柄もない。勉強は嫌い。運動は苦手。秀でていることなんて何もなくて、まぁ……しいていうなら、草を根っこから抜くのが上手？　……そんな程度。
「そういえば平澤さん、この前…河原先生に告白していたじゃないですか？」
「…え？」
「あれから気まずさとか無いですか？」
「……」
柚木先生のその言葉に、勢いよく立ち上がる。
（な、何で⁉　何で知っているの⁉）
口をパクパクさせ、呆然と柚木先生を見つめると、噴き出すように笑い始めた。

「何で知っているのか、と思ったのでしたら…甘いとだけ言っておきましょうかね」
「……」
「校舎が一棟しかない小さな学校ですよ。どこで告白しても目につきます。廊下の窓が開いていたら尚更。声が良く届きますし」
思わず顔が赤くなる。……柚木先生に見られていたなんて…。
「どこで誰が見ているか分かりませんから。気をつけた方が良いです」
「そうですね……」
頬を軽く膨らませ、草抜きを続行する。
（恥ずかしすぎる……。だけど逆に、柚木先生で良かったと諦めるしかないか）
そう思い、再び草に目線を向ける。
「……」
一瞬だけ視界に入った柚木先生は、少しだけ口角を上げて私の顔を眺めていた。

◆

草抜きが終わり、荷物を持って校舎から出た部活からの帰り道。……まだ。
また、学校の敷地と道路の境界で…河原先生がタバコを吸っている。その光景が目に入り、私の心臓は一気に心拍数を上げた。相談室で『先生のこと諦めない』と宣言をしてから、二人で会うのは初めて。だから少し緊張するけれど……。
「……よし」
唾を飲み、軽く息を吐いて…先生の元へ駆け寄った。
「かーわはら先生っ♪」
「……平澤……」
少し身体を跳ねさせ、あからさまに嫌そうな顔をした河原先生。その表情に少しだけ傷付いたが…挫けない。
「タバコって美味しいんですか？」
「……お前は知らなくて良い。てか何で俺がここに居たら現れるんだよ」
「違います。部活が終わるタイミングで先生がここに居るんですよ」
更に先生の方へ近付くと、電子タバコの本体から吸い口を抜いた。そして携帯用の吸殻入れに入れて、冷たく一言。
「子供にとってタバコは害だ。近寄るな」
「こ、子供じゃないです！」

「子供だよ。高校生なんて」
そう言って河原先生は校舎に向かって歩き始めた。
「〜〜〜っ!!」
身体に力が入り、思わず目に涙が浮かぶ。
（全く相手にして貰えない!!）
私が告白して、少しでも嬉しかったと思ってくれたのでしょう？　なのに、河原先生からはそんな雰囲気、一切感じない!!
「子供扱い、悔しいっ!!」
そう思いつつ、子供なのは事実。それがまた悔しい！
悔しすぎて、走って家まで帰った。

大人

「愛理。私、大人になりたい!!」
「えっ？」
朝、顔合わせてからの第一声。そんな私の言葉に愛理は目を丸くし、圭司はお腹を抱えて笑い始めた。
「大人になりたいって、そう簡単になれるかよ！」
「分かんない。けど、河原先生に意識されるような人になりたいの!!　子供扱いされるんじゃなくて!!」
昨日帰ってから、好きな人に意識してもらう方法を調べた。
〈押して引く〉とか。〈相手の話を聞く〉とか。〈自分のことを話す〉とか。〈秘密を共有する〉とか。
もうね、違う。違うの。私が求めているのはそういうことでは無いのよ！　河原先生の場合、押して引いたらそれで終わりだよ。そんなこと思いながらネットサーフィンをし続けた。そして私が辿り着いた、一つの答え。
「大人に…なる」
（これしかない!!）
超短絡的な私は、そう思ったのだった。

終

ここまで入力可

【どこの誰よりも、先生を愛してる。】

著者紹介

海月（くらげ）いおり

恋愛・青春ジャンルを中心に執筆。
ベリーズカフェ・ノベマ！・エブリスタなど
様々な小説投稿サイトに出没中。
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○
○○○○○

QR

QR